

市長が仕事に対する「思い」を持ってほしいと、政策秘書課職員に話をした内容です。

思いを抱くということ

私はよく「志あれば道あり。訳（わけ）知りに志なし。」と言ってます。以前にも「によぜがもん」に書きましたが、何でも知っている人は、頭の中だけで結論を出してしまい、結局何もできないことがあるようで、反対に何の知識がない人でも、「これがやりたい！」という志があれば、自然と道は開けるものなのです。

これまで紙上では快適度日本一といった評価を頂いている本市でも、現場では様々な問題が起こっています。市民の皆さんのご協力や職員の尽力もあり、幸い大きな事件や事故には至っていませんが、犯罪や交通事故、高齢者介護の問題や、認知症の方が外出中に道に迷うなど、毎日いろいろな報告が私のもとに寄せられています。市役所では対応できない問題も多く起こっており、もどかしい思いをすることもよくあります。

現場でこうした問題に職員が直面したとき、担当が違うために対応できないかもしれません。制度で対応するのが難しい問題かもしれません。私はよく、こうしたことを縦割りの弊害だと言っているのですが、まず職員は現場を見て、心が動かないといけないと思います。人の相手をする仕事では、感受性がないと良い仕事はできないのです。たとえ自分の担当分野では何もできなかったとしても、困っている人に出会って、この人を何とかしたいという思いを抱き、心が動くことです。そして、その気持ちに従って動けば、自分が受け持つ担当を超えて動けるはずです。働きかけの仕方を考えたり、制度での対応が難しくければ、制度を変えることができないかと考えたりすることになるでしょう。

職員には、机上で情報収集にいそしんで訳知りになるのではなく、積極的に現場に出て、思いを抱き、志を持ってもらいたいと思い、いつも現場に出てくださいとお願いしています。そこで出会う物事に心動かされることが、社会をよりよくする原動力そのものなのです。

～市長の話を聞いて～

仕事を務める上で、モチベーションがとても重要だと思っています。定年退職するまで

問題を起こさないよう、息をひそめて仕事をしているようでは、誰の役にも立てませんし、何の面白みがありません。もちろん仕事は楽しいことばかりではありませんが、出会う様々な物事に心を動かされる、感受性を大切にしたいと思います。